

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月6日現在

機関番号：14301
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2009～2011
 課題番号：21510261
 研究課題名（和文） タイ・ミャンマー国境域移動者の生活実践：少数民族の社会ネットワークと文化再生産
 研究課題名（英文） Life Practices among Mobile Population in the Thai-Burma Borderlands: Social Network and Cultural Reproduction among Minorities
 研究代表者 速水 洋子 (HAYAMI, Yoko)
 京都大学・東南アジア研究所・教授
 研究者番号：60283660

研究成果の概要（和文）：

国境の町メーソットは、後背地に難民キャンプを持ち、タイの経済開発や、国境をはさんだ両国の関わる国際協定において地政学的に重要な位置づけをされている。また、少数民族居住地域として国境を跨ぐ文化・言語圏にある。そうした国境の場にあつて、国境を越えて流入する移民は、様々な制約のなかで社会的ネットワークと生活を形成しており、そのこと自体が国境の社会空間を形作っていることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

Mae Sot on the Thai-Myanmar border is geo-politically strategically positioned in Thailand's economic development, and numerous international treaties and further has many refugee camps in its outlying areas. It also lies within a minority cultural linguistic zone across the national border. The migrants who keep coming in an incessant flow, form their social network and living within the various constraints, and this in turn, constitutes the social space in the border region.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目： 分科 地域研究、細目 地域研究

キーワード：タイ・ミャンマー国境域、越境移動、社会ネットワーク、文化再編、

1. 研究開始当初の背景

タイ・ミャンマー国境沿いには難民キャンプとともに、特に90年代より安価な労働力を求めて工場地区が形成された。現在タイ全土

で二百万人と言われるミャンマー人労働者は、低賃金で3D（dirty, dangerous, difficult）と言われる労働に従事する。これに対して国境経済圏の経済的効用や、制度的基盤としての移動者の登録制度など政策

に関する研究が行われてきた一方、移動者自身の生活実態については過酷で不安定な境域の状況に関する人権報道が中心であった。

研究代表者はタイ・ミャンマー両国におけるカレンと呼ばれる特定の民族集団について、マジョリティとの関係性の変遷の中で家族、共同体、宗教など社会文化的実践や、移動者を送り出していたカレン州の実態を調査してきた。広域に分布するカレンが家族形成の核となる文化的実践を継承する過程に着目し、こうした緊密な社会関係に裏打ちされた文化的継承が、国境を越えた移動においてどのように再現・あるいは変化しているのかという問いにいたった。

ミャンマー・タイ国境域は脆弱な国境といわれ歴史的には交易・内乱回避・資源や市場等を求めた人の移動が顕著な地域であり、多様な民族が国境を跨いで生活を築いてきた。20世紀初頭迄に移住し定着した人々については、タイの村落調査に基づく国境意識、移住の過程と歴史や、移住の過去をどのように表象し記憶するかを問う研究などがある。ここでは移住地の生活が既に所与のものとされ、故地は記憶の彼方に対象化されている。

その後両国の国家体制の歩みは大きく分かれ、経済発展を遂げるタイと軍政の続くミャンマーとの国境は、二つの体制のインターフェースとなった。難民や労働移民の増加は、80年代末以来の両国の政治・経済的状況と相互関係の変化により、その後も変転してきた。タイは隣国の天然資源や安価な労働力を吸収すべく国境をはさんだ経済関係に乗り出し、国境をつなぐインフラや制度が整備された。一方そのような制度の枠をかいくぐって未だ紛争の続く国境では、難民と労働者が様々な形で往来している。そうした中で国境経済圏構想を称揚する研究や、移動労働の基盤となる法的整備についての研究がある一

方で、報道は人権を脅かす過酷な労働状況への警鐘、保健衛生・健康上の諸問題を取り上げてきた。しかし、東南アジアでも島嶼世界ではボーダーレス状況を生活の場と歴史的時間の流れから論じた研究(*)があるのに対し、大陸部では移動者の生活の実態、社会的な対応について、ほとんどブラックボックスといえるほど不明である。研究を困難にしてきた政治・社会的状況があるのだが、それゆえにこそ可能な限り大陸部の境域の状況を生活の場から明らかにする必要がある。

2. 研究の目的

本科研では、ミャンマーから労働目的でタイへ入国する人々について国境の町メーソットで、その社会ネットワークの広がりや文化再編の状況を調査することが主たる目的である。歴史的に常に顕著な移動に特徴づけられるこの境域で、今日の状況がどのような移動者による社会・文化的な対応を生み出しているのか。跨境域を生活の場とする人々、とりわけ少数民族がどのように社会ネットワークや文化の再編によって対応し、ボーダーレスと言われる現代にあって境域の形成に関与しているのか、それは国家単位の制度に対してどのような力となりうるのかを問う。

マイノリティとしてのカレンからの複眼的な視点により境域における適応を検証することが可能である。そのことはまず第一に移動者の生活の実態をより正確に理解することにつながる。第二に「家族圏」やネットワーク型と言われてきた東南アジアの家族と社会関係や組織の在り方が、グローバル化のもとで移動性がより顕著になる中で境域においてどのように適応・変容しているのか社会変化を基盤から問うこととなる、第三に境域におけるマイノリティの文化実践を通

じて、国家に対峙するのとは異なる形でのアイデンティティ形成の在り方を見出す。総じて跨境域における少数民族の社会ネットワークとアイデンティティ、文化再生産を通じて、国家中心の社会科学的アプローチでは見えなかった境域の実態と可能性を問う。

増え続ける越境者は、国家間の社会・経済・政治的状況の差異や過酷な労働状況の中で、はざまに身をおきながら故地との絆を保ち、家族を分散させて送金によって維持し、社会関係や言語、宗教・文化実践を継承・適応させることで移動先での生活を展開する。双系的につながりをたどり「家族圏」と特徴付けられた東南アジアの社会組織基盤とネットワーク型社会形成は、流動する境域の状況で、どのような新たな社会関係と文化的実践を産み出しているのか。本研究は、地域内経済格差が広がり、国家体制でも大きな差異が生じている東南アジアで、境域を生活の場とする人々がこの状況をどのように生活実践に取り込んでいるかを検証し、社会的紐帯の形成、文化の再生産の場としての境域について再考し、生活の実態を下記の問題意識に基づいて検証する。

(1) 社会的な関係性とネットワーク

タイの国境経済圏構想を後ろ盾にした越境者の安価な労働力搾取といった厳しい労働状況、不安定な経済・社会的基盤に対して、生活の場で生活戦略としてどのように社会的な関係性が形成され、どのようなネットワークが機能しているのか。特に、近親者の関係性がどのように強化され、あるいは相対化され、社会的ネットワークが形成されるのか。越境状況にあって経済・社会関係の基盤となり生活実践の場となる家族的な領域や共同体がどのような関係より構成され、変容を遂げているのか。西欧社会におけるトランス・ナショナルな家族の研究に対して、従来から

ネットワーク型と言われてきた東南アジアの家族や社会組織にもあてはまるカレンの事例が、こうした域内の越境においてどのような相違や可能性を見せるのか、その適応力と創造性を問う。

(2) 文化的実践の継承と再編による対応

上述のような越境者による社会的ネットワークは、民族や宗教などをめぐってどのように結集するのか。宗教や民族は差異を交渉するアイデンティティの政治においてどのような役割を果たしてきたか。その中で文化的実践が生活の場でどのように継承され、変更を加えられてきたのか。

生活実践の根幹から、国境を挟む社会ネットワークの形成と文化再生産の過程を追う。それにより中心と周縁の図式を再考し、従来の「脆弱な国境」の議論とは異なり、生活実践のただなかにおいて国家の制度に大きく規定されながらも、その制度や枠組みがいかに国境から相対化されうるかを問う。

3. 研究の方法

本研究では、目的で述べた二つの視点に基づく調査を同時に進めることで、その相互関係のもとで双方の深化を図る。国境の町メソットにて現地調査を行い、データを収集する。また、タイでも日本でも、同地域や、異なる境域で同様の関心を持つ研究者と交流し、日本ではセミナーを開催して広域かつ多角的な理解を深める機会とする。

調査地と準備 本研究では、タイにおけるミャンマー労働者の一割、少なくとも20万人が働くと言われ、また難民キャンプもある北西部ターク県を調査地として選定する。県内にある200余りの工場の労働者の95%をミャンマーからの労働者が占める。2004年にはタイ国はメソット国境経済圏構想を立ち上げた。メソットはミャンマー側のミャワデ

ィからモウルメインに至るまで、古くからの商業ルートであり、特にカレン住民による移動が連綿と続いてきた地域である。

調査研究内容と方法　　メーソットで移動するカレンの子供たちのための学校、ミャンマーからの農業労働者のいる周辺カレン村落などを訪ねた。

・タイではまず移民管理や労働管理、人権問題への対処などの観点からこれまでどのような対応がなされてきたか制度的な変遷を把握した。また、チュラーロンコーン大学アジア研究所・アジア移民研究センター等にて資料を収集するとともに、タイ研究者を訪ね、タイにおける研究動向を把握し、意見交換を行った。

・その上で現地に向かい、まず調査の拠点となりうる場所やキーパーソンを訪問した。現地事情をよく知る NGO やタイの研究者ネットワーク、移民や難民の子弟を対象とする学校、教会や寺院などの宗教施設、クリニックなどの医療・保健衛生施設などである。基本的な事項に関して、歴史的制度的な基盤を把握した上で、研究の目的に挙げた着眼点を中心に調査を行った。

・以前調査を行った移民の送り出し元であるミャンマー、カレン州を訪問し、メーソットへの移民の出身地をたどり、帰国者のその後の状況を検証した。

4. 研究成果

初年度は、まずそのための制度的な基盤の理解に向けて資料収集とインタビュー調査、そして今後の調査のための予備調査・ネットワーク形成にあたった。

チュラーロンコーン大学アジア研究所アジア移民研究センターやタマサート大学で資

料収集を行った。また、バンコクにオフィスをもち国境にて支援活動を行う国際 NGO と連絡をとり、メーソット現地で NGO 組織、保健衛生や教育に関わる団体、学校や、移動労働者のコミュニティを訪れ調査した。また、現地ではメーソットで調査を展開しているタイの研究者とも幾度か会合をもち、時には同行しながら調査を行った。

初年度1月に、海外からタイ人研究者を招き国際ワークショップに参加した。現在タイにおける移動労働をめぐるテーマの広がりなどを把握することができた。

2年度目は、短くメーソットを訪れ、移動労働者のコミュニティを訪れ、国境にある国定カリキュラム外の学校や、宗教施設、医療援助ベースなどを訪れて調査した。最終年度は、自身で調査に行くことが不可能となり、研究協力者の小堀栄子氏に調査を依頼した。

国境の Learning Center と呼ばれる移動労働者の子弟のための、タイ国定カリキュラムの枠外のボランティアベースの学校を訪れ、移動労働者の子弟の教育について尋ね、また、キリスト教教会と仏教寺院、そして移動労働者のコミュニティを訪れて話を聞いた。

この様に、事情により申請時の予定よりも自分自身で調査に赴く期間が短かったが、大学院生や研究協力者を派遣することで、追加データを収集し、共著論文を執筆し本年度二つの投稿論文を査読付きジャーナルに送ることができた。

一つは、国境のメーソットでのインタビューデータを利用しつつ、バンコク近郊の漁港町であり国境から離れた県にあるサムット・ソクラーンにおけるミャンマーからの移動労働者へのインタビューとをベースに二つの地点における移動労働者の家族形成や本国との関係、文化的実践と労働をめぐる

選択を比較した論考である。従来、タイ国内のミャンマー人労働者は一つのカテゴリとして論じられてきたが、メーソットのような国境地域と、より中心に近い地域では、労働者の移動の様態、労働条件や移民としてのステータス、タイへの適応、家族形成、本国とのつながりの保ち方においてかなり大きな相違がみられることがわかった。それは、一つには実際には文化的・歴史的・社会的にも連続している国境域と、より国家の内奥にある地域との相違に起因することを指摘し、その二つの相違を戦略的に用いる移動者の適応についても論じている。これによって、国境のメーソットの地政学的特質が明らかになった。この成果は、本科研によって助成した京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科のノッパオン・ラビパットと共著の英文論文 Seeking Haven and Seeking Jobs Two Tiered Adaptation among Migrant Workers from Myanmar to Thailand として仕上げ投稿し、現在査読中である。

また、期間中に本科研により派遣したポストドク研究者小堀栄子氏とは、熱帯医学のジャーナルに英文共著論文を投稿した。国境の町メーソットにおける移動労働者のマラリア感染対策について、本科研で得た知見に基づき、従来の国境の水際でいかに感染を食い止めるか、という考え方に対して、絶え間なく流入する移民労働者のマラリア感染対策がいかに困難であり、まさに国境の両側での広域にわたる対応が必要であるかを論じたものである。本科研における移動労働者の移動パターンの調査、国境の居住地での生活実践などの理解があつて初めて可能な議論であった。本稿も投稿後、現在査読中である。

加えて、これまでのミャンマー側の調査に基づいて、ミャンマー・カレン州における文化実践が、いかに国境移動者のネットワーク

の要となっているかにふれながら、現地の仏教徒カレンの宗教実践を論じたものである。(業績⑤)。

本研究は、国境の移動労働者についてその跨境域を生活の場とする人々、とりわけ少数民族がどのように社会ネットワークや文化の再編によって対応し、ボーダーレスと言われる現代にあつて境域の形成に関与しているのか、国家単位の制度の現地での実践の多様性を指摘しながら、社会関係やネットワークの広がり、文化実践との両方から明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計10件)

- ① Hayami, Yoko “Relatedness and Reproduction in Time and Space: Three Cases of Karen across the Thai-Burma Border.” in *The Family in Flux in Southeast Asia*. 2012. pp. 297-315.
- ② Hayami, Yoko “Introduction: The Family in Flux in Southeast Asia.” in *The Family in Flux in Southeast Asia*. 2012. pp. 1-26.
- ③ 速水洋子「生のつながりへ：開かれる親密圏」『人間圏の再構築：熱帯社会の潜在力』2012. 121-150.
- ④ 速水洋子・木村周平・西真如「序：人間圏の再構築に向けて」『人間圏の再構築：熱帯社会の潜在力』2012. 1-18頁。
- ⑤ Hayami, Yoko “Burmese Migrants to Thailand: Vignettes from the Border as In-Between Space” *CSEAS Newsletter*. No. 63. 2011. 21-22.
- ⑥ Hayami, Yoko “Pagodas and Prophets: Contesting Sacred Space and Power among Buddhist Karen in Karen State” *Journal of Asian Studies*. 70(4)1083-1105. 2011.
- ⑦ Hayami, Yoko Book Review: Ashley South. *Ethnic Politics in Burma: States of Conflict*. *Journal of Southeast Asian Studies* Vol. 24(3) 554-6.. 2011.
- ⑧ 速水洋子「序 親子から生のつながりを問いなおす <特集>親子のつながりー人類学における親族／家族研究再考」『文化人類学』75(4)2011：483-493.
- ⑨ 速水洋子「カレンとは誰かーエコツーリズムにみる応答と戦術としての自己表

研究者番号：60283660

(2)研究分担者 無
(3)連携研究者 無

- 象』『先住民とは誰か』窪田幸子・野林厚志編 世界思想社 2009年 248-272頁
- ⑩ 速水洋子「ビルマのカレン民族における文字と想像の共同体を再考する」特集「人類学とキリスト教」『民博通信』127号 14-15頁. 2009

〔学会発表〕(計4件)

- ① Hayami, Yoko “Pagodas and Wedding Vows: Religious Practices among Buddhist Pwo Karen in Karen State from a Comparative Perspective” International Conference for Thai Studies. Bangkok. 2011.7.26.
- ② Hayami, Yoko “Multi-Laterality and the Changing Global Mapping of Southeast Asian Studies” CAPAS-CSEAS Workshop for Young Scholars of Southeast Asian Area Studies. 台湾中央研究院. 2011.8.9.
- ③ Hayami, Yoko “Upland vs. Lowland as Seen through Gender: Distant Representations and Immediate Relationships.” JSPS Asian Core Workshop. Kyoto. 2011.1-18-19.
- ④ Hayami, Yoko “Social and Cultural Practices among Labor Migrants in the Thai-Myanmar Borderland” The First KASEAS-CSEAS Joint International Symposium “Inter-dependency of Korea, Japan and Southeast Asia: Migration, Investment and Cultural Flow”. 韓国東南アジア学会. 韓国 2009.6.19.

〔図書〕(計2件)

- ① 速水洋子・西真如・木村周平編『人間圏の再構築：熱帯社会の潜在力』（講座生存基盤第三巻）2012. 京都大学学術出版会
- ② Hayami, Yoko, J. Koizumi, Chalidaporn Songsamphan, and Ratana Tosakul Eds. The Family in Flux in Southeast Asia: Institution, Ideology, Practice. 2012. Silkworm Books and Kyoto University Press.

〔産業財産権〕

- 出願状況 (計0件)
○取得状況 (計0件)

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/edit/bac-k-issues/> (Newsletter No.63)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

速水 洋子 (HAYAMI, Yoko)